

支所運営は 地域を代弁する立場で



鎌倉市 市民活動部

玉縄支所長
木村 浩之さん

民主主義の原点ともいえる地方自治にはもともと強い関心があった。鎌倉市役所への勤務を目指したのもそんな理由からだったが、玉縄支所に着任して、まず強い感動を受けたのは地域社会の自立意識と言う。

「他の支所を回ったわけでもありませんし、玉縄に来てわずかな期間ですが、自町連や社協、民生委員、iネット、それに女性の会の皆さんの活動を見るにつけ、その自立精神には深い敬意を払います」。

行政としては、市民・住民の人達が地域社会の中で自立し、健全な活動を進めていくためのお手伝い役。より高いレベルに達するためにも、まずは地域の中に自立への強い意識があったればこそのこと、と言う。

「私たちは行政の人間ですが、玉縄支所での活動は地域に生きる人たちの目線に合わせ、地域を代弁する立場で物事を考え行動しなければと考えています」と強調する。

昭和 54 年 7 月に鎌倉市の職員に採用される。当時も就職難で、採用環境は厳しく、それでも地方公務員を目指した。横浜市に居住していたが、仕事を選ぶなら、コンパクトな規模の市に強い関心を持っていた。

鎌倉は距離的にも近く、歴史散策などに良く出かける大好きな街だった。勤めるならば、ここ鎌倉と決めていた。



奉職以来、8 カ所余りのセクションを経験するが、観光商工課の時代には、中小企業の融資を担当するほか、平塚競輪場を借りて、鎌倉市が競輪事業を主催するその担当にもなった。

言ってみれば、博打場の胴元的役目だが「一時期はしっかりと収益を上げ一般会計の予算にも寄与していたはず」。3 年間ほど実務を担当し、営業的なセンスも磨いた格好だ。また、関谷でのゴミ処理施設問題が取りざたされていた時期には、資源循環課に配属され、玉縄地域にも随分足を向け「地元の方にはいろいろご迷惑をかけたりした」時期もあったとか。

前市長の時代、第 3 次総合計画を立てる企画課で、市長から「市民 100 人会議」の提案が出され、その企画作りと原局を努めることになる。市民活動やみどりの保全、教育、それに街づくり、市街地整備など多岐な分野について、それぞれのチームを作り、住民同士あるいは市側とのディスカッションなど、白熱した議論を続けて来た。

現在、災害への対応など大きな関心事に直面していることもあるが、地域のことは地域で解決していく。そのためには、それぞれのコミュニティ活動を基盤にする、そんな意識が強く芽生えてきたのも、こうした取り組みが一石を投じ、今日につながったと言ってもいい。

深沢地域は旧 JR 跡地の取組みで鎌倉、大船につぐ第 3 の拠点づくりに関心が集まっている。大船は駅前の再開発や商業の集積地としての活性化が図られ、旧鎌倉や腰越は、従来からある観光資源などの一層の拡充と言ったバックボーンがある。



一方、玉縄地域には大船駅の西口整備が完了した現在、とり立てた焦眉の大型プロジェクト(計画)はない。

「税の配分の観点で公平なのか、そんな議論があるかもしれませんが、高齢化していると言っても玉縄には比較的若い世代の住民も多い。玉縄城 500 年と言う歴史を掘り起こした実績もあるわけで、いろんな

アイテムが活性化されていくことで、玉縄への公共的投資が必要になるニーズも出てくる」ことにもなりそう。

関谷周辺の畑は、鎌倉にとっては数少ない農地で、しかも、人気の鎌倉ブランド野菜を生み出す貴重な資産。「そんな農地の保全なども大事なことでしょね。私たちも地域の皆さんと、よく話し合い、理解し合って協力していく」。行政の一員であったにしても、玉縄に住む人たちへのよき理解者として、行政側に代弁していく立場を訴える。



木村さんの父親は砂糖会社のサラリーマン。てん菜などの栽培地に近い工場などへの転勤もあった。ご自身が生まれたのは東京だが、小学生の頃は北海道にいた。そのせいもあってか、趣味はスキーやスケート。学生時代はアイスホッケーにも夢中だった。最近は時間も体力もなく遠ざかるばかりと笑うが、穂高や 100 名山の多くを登ったアルピニストでもある。昭和 32 年生まれの 57 歳。横浜市緑区に在住。